

<p>『イン・ウィッチ・ウィ・サーヴ』（軍旗の下に） 原題 <i>In Which We Serve</i> 1942年</p>	<p>執筆：清水 純子</p>
<p>制作国</p>	<p>アメリカ</p>
<p>スタッフ&キャスト（監督、脚本家、俳優、その他）</p>	<p>スタッフ：監督ノエル・カワード、デヴィッド・リーン/ 脚本& 製作 & 音楽ノエル・カワード/ 撮影 ナルド・ニーム/ キャスト：ロバート・ニュートン：フランク・ギボンズ/ セリア・ジョンソン：エセル・ギボンズ/ ジョン・ミルズ：ピリー・ミッチェル/ ケイ・ウォルシュ：キーニー/ スタンリー・ホロウェイ：ボブ／ボブ・ミッチェル/他 /</p>
<p>画像</p>	
<p>カラー・モノクロ</p>	<p>モノクロ</p>
<p>時間</p>	<p>110分</p>
<p>ストーリー</p>	<p>ナチス・ドイツのポーランド侵攻により 1941年イギリスは第二次世界大戦に参戦する。イギリス海軍が誇る駆逐艦トリンは、盛大な進水式を終えた後、クレタ沖で戦うが、ドイツ軍の爆撃機ユンカース 88 によって撃沈される。キンロス艦長とその部下は救命ボートにつかまって漂流するが、助けを待つ間に水平の脳裏には家族と過ごした楽しかった日々、立派だったトリン号の面影が浮かぶ。映像は兵士の回想と現実を交互に混ぜ合わせて展開する。通りかかった駆逐艦フロートリアに発見されて救助されたキンロス艦長とその部下はアレキサンドリアに向かう。一人アレキサンドリアを旅立つキンロス艦長は、イギリス海軍に仕え、国家のために戦うプライドと榮譽について演説し、戦意を鼓舞し、水兵一人一人と握手する。</p>
<p>時代設定</p>	<p>1941年第二次大戦前の夜</p>
<p>場所</p>	<p>クレタ沖</p>
<p>社会背景</p>	<p>ドイツは経済的に困窮し、ナチス党のアドルフ・ヒットラーが国民の支持を得て政権をとり、第二次世界大戦の火ぶたを切る。ドイツのポーランド侵略により、イギリス軍がドイツに宣戦布告。英国軍の駆逐艦トリンはクレタ島に出撃するが、ドイツの戦闘機によって撃破される。</p>
<p>文化的背景</p>	<p>イギリス軍海軍は海兵隊と共に大英帝国の誇りであった。七つの海を支配したと言われる島国イギリスにとって、海戦での勝利は国力と権威の象徴。</p>

使用言語	イギリス英語
テーマ	国家のために命をかける意義と誇り。英国駆逐艦トリンに乗り込んで撃墜されたイギリスの海軍の水兵たちの物語。
みどころ	撃沈された駆逐艦トリンの救命ボートで救援を待つ水兵たちの脳裏に浮かぶ思い出を、フラッシュバックの形で登場させ、単なる戦争アクションではなく、人間ドラマに仕立てた。
印象深いせりふ	Narrator: Here ends the story of a ship ,but there will always be other ships, for we are an island race. Through all our centuries, the sea has ruled our destiny. There will always be other ships and men to sail in them It is these men, in peace or war, to whom we owe so much. Above all victories, beyond all loss, in spite of changing values in a changing world, they give, to us, their countrymen, eternal and indomitable pride.
授業教材用 メリット	戦争を知らない子供たちに、戦争がどういうものかという一端を教える。20世紀中庸は、戦争に踊らされた時代だったという世界史の勉強になる。
授業教材用 デメリット	家族との別れや仲間の死を扱っているのに、戦意高揚で終わっている。戦争および国粋主義賛美のプロパガンダ映画とみられても仕方がない。イギリスの国のために死ぬ若い命を讃えているが、全体主義の押しつけと賛美に違和感を覚える人も多いはず、その意味で現代の日本人には時代錯誤に見える。兵士のイギリス英語のアクセントに癖があり、早口で聞き取りにくい。
映像入手元	ウエストブリッジ/パイオニア LDC
原作の有無	映画出演者でもある作家ノエル・カワードの書き下ろし。
支持反応	Rotten Tomatoes による評価（批評家 93、 観客 76 ）
キーワード	第二次世界大戦前夜、クレタ沖、駆逐艦トリン、イギリス海軍、ドイツ、ナチス、ポーランド侵略、撃破、救命艇、家族、別れ、死、戦意高揚。

Copyright © Junko Shimizu All Rights Reserved.

★本サイトに掲載される情報の著作権は、清水純子に帰属します。

許可なく複製、改変、アップロード、掲示、送信、頒布、販売、出版等を禁止します。